

<エッセイ> 「レコ室からこんばんは」から

著者	倉本 一宏
雑誌名	日文研
巻	54
ページ	32-38
発行年	2015-03-31
URL	http://doi.org/10.15055/00004047

「レコ室からこんばんは」から

倉本 一宏

京都にあるKBSラジオに、「レコ室からこんばんは」という深夜放送番組があった。という他人行儀だが、実は我らが細川周平さんが担当されていた音楽番組である。

二〇一三年に『御堂関白記』がユネスコの「世界の記憶（俗にいう世界記憶遺産）」に登録されたのを機に、私などにもラジオの出演依頼が相次いだ。が、何とこの番組からも、『御堂関白記』で二回、何か話してくれないか」という依頼が来た。

もちろん、かねて畏敬する細川さんからの依頼だったので、一も二もなく快諾した。日文研用語の「快諾」ではなく、文字どおりの快諾である。基本的には音楽番組ということで、色々なレコードをかけてもらえるのも楽しみだったのだが、結果的には自分の所蔵しているCDを持ち込んで、それをかけながら、二人で感想を言い合うという番組になった。まったく台本なしの収録である。『御堂関白記』はそっちのけで、音楽の話ばかりになったのは、言うまでもない（二回目にはギターを持ち込んで、一曲歌わせてもらった。私は元、駒場フォーク村所属だったのである）。

番組は二〇一四年一月二〇日と二七日に放送され、大きな反響を、まったく呼ばなかった。日曜の深夜にローカル局のラジオを聞いている方というのは、きわめて限られるのである。

ところで最近、所蔵しているCDとDVDとMDをファイリングしてデータベース化する作

業を続けているのだが（LPとカセットテープは未だ手付かず）、その際、全部を聞き直して
みることにした（もちろん、真面目な原稿を書きながらですよ）。

そしてこの放送のCD-Rの順番が来て、何気なく聞いていると、我ながら、なかなかいいこ
とをしゃべっているのである。これもひとえに、細川さんのお人柄によるものなのだが、普段
は私はこんないいことを話すことはないのです、これをごく少数の方だけのお耳を通過させただ
けではもったいないと思い、ここに編集して、『日文研』に載せていただくという次第である。

なお、はじめは桂枝雀師匠の「どうらんの幸助」について、所蔵している六バージョンを比
較するという原稿を書き始めていたのだが、その最中にこのCD-Rを聞き、細川さんとKB
Sの担当ディレクターである小林恭子さんの承諾を得て、こちらに差し替えたというわけであ
る。「どうらんの幸助」論は、いずれどこかで発表したい。

それでは、放送された曲順に、私の発言をお示しする。

一、「藤原道長と『御堂関白記』」（二〇一四年一月二十日放送） 実はジャズ編

• Miles Davis “Round Midnight” (1955) — “Round About Midnight (Legacy Edition)” より

皆さんがご存じの『ラウンド・ミッドナイト』ではない、その前のニューボートのライブの
バージョンです。作曲者のモンクと共演しています。この時の演奏が認められて、マイルスは
メジャーのコロンビアに移籍するわけです。この演奏では、お馴染みの「ジャンジャンジャ
ン」というブリッジがないのです。モンクの影響下にある時には原曲に忠実で、ギル・エバン
スと独自の世界を築いてからは、あのブリッジが入ります。面白いのは、それ以降、マイルス
の影響下にある人、ハービー・ハンコックとかチック・コリアとかは、ブリッジを入れるので

す。ウィントン・マルサリスなんかも、ハンコックの下にいる時はブリッジを入れるんですが、独立してからは入れないのです。これは面白い傾向です。

• John Coltrane “Autumn Leaves” (1961) — “Graz Concert Vol. 1” より

私はコルトレーンが一番好きなんです。コルトレーンの全演奏記録でも、「枯葉」を吹いているのは生涯でただ一回だけなんです。グラーツでのコンサートです。何でこの時だけ、「枯葉」を吹いたのだろうと推測しますと、最初、マッコイ・タイナーのソロが四分半くらい続くんです。そこにコルトレーンがいきなり入ってくるんで、これはピアノトリオの曲として始まったのに、あまりに素晴らしいのでサックスを持って入ってきたんじゃないかなと想像したりしています。あと、コルトレーンが長生きしていたら、どんな演奏をやっていたかと、あれこれ考えてしまいます。

• John Coltrane “Wise One” (1961) — “Crescent” より

この曲がコルトレーンの中で一番好きなんです。コルトレーンは一曲録音するのに十何回もテイクを録るんですが、本当の天才は一回で決めるんだと思います。吹き続けて下によだれの水溜まりができるコルトレーンの方に、私は天才よりも憧れを感じますね。

• Stan Getz “La Fiesta” (1972) — “Portrait” より

チック・コリアの「ラ・フィエスタ」は、普通はリターン・トゥ・フォーエバーで聞いていると思いますが、その前にスタン・ゲッツのコンボで演奏しています。普段は「クール」と捉えられるゲッツが、リズムが物凄いのので（ドラムはトニー・ウィリアムス）、ここでは吹きまくっています。この後、みんな独立してしまい、ゲッツはクールなスタイルに戻りますが、このままこのコンボが続いていたらどんな演奏を行なっていたかと考えてしまいます。人間の評

価と運命なんて、わからないもんですね。

・仲宗根かほる“Papa Loves Mambo” (2001) — “Papa Loves Mambo” より

最近、年を取って、硬派なジャズよりも女性ポーカーに凝っています。この方は中学の卒業式の日に出出して沖繩から東京に出て来た方です。このところ所在不明になっています。ご存じの方がおられましたら、お知らせください（その後、銀座のジャズクラブ「Swing」のオーナーである岩本悟さんから、沖繩に帰っている由をご教示いただいた）。

・MAYA “Eu sou um piano (私はピアノ — 曲名非通知)” (2002) — “She’s Something” より

かほるさんと入れ替わりに出てきたのが、MAYAさんで、この人は七カ国語で歌うという才人です。これはポルトガル語の「私はピアノ」です。私はこの人のファンクラブに入っていて、追っかけをやっていきます。

二、「藤原道長の日常生活」(二〇一四年一月二七日放送) 実はロック、フォーク編

・Bob Dylan “Seven Days” (1975) — “WATERBURY 1975 Rolling Thunder Revue” より

私はディランのキャリアの中で、七四年から七六年が一番好きなんです。特に七五・七六年のローリング・サンダー・レビューというツアーは、海賊版を買い込んだり、演奏順に並べ替えて聞いたりしています。学生の頃はフォーク研で、盛んに弾いていました。その頃は英語も少してきたので、ディランの詩を訳したりもしていました。これは珍しい「セブン・デイズ」後にストーンズのロン・ウッズがレコーディングしています。

・Bob Dylan “Sukiyaki (曲名非通知)” (1986) — “Positively Fareast” より

ディランが最初に来日したのは七八年の三月で、私はちょうど入試にあたっていました。コン

を根に持っていたようで、八〇年代になってザ・バンドが使ってたマリブの「シャングリ・ラ」スタジオで録音し、しかもガース・ハドソンをミュージシャンに使ったんです。アルバムの名前も「Shangri-la」にし、酒も断って録音に臨みました。私は拓郎さんのアルバムでこれが一番好きなんです。この曲でもガース・ハドソンの例のサククスが出てきます。「男の夢を叶わさん」という拓郎さんの詩を思い起こします。

・吉田拓郎「ある雨の日の情景」(1972) — 自演 with 森田節

お粗末様でした。森田さん、ありがとうございます。

・吉田拓郎「永遠の嘘をついてくれ」(1995) — 『Long Time No See』より

拓郎さんはずっとくすぶっていて、これで引退だと何度も言っていました。その時、若い頃に拓郎さんの追っかけをしていた中島みゆきさんが、「もっとしつかりせんか。年を取っても頑張るの。かつては自分の憧れだったあんたは、嘘をつくならずっとつき通してくれ。」という歌を与えました。後につま恋で二人はデュエットしています。この曲は、東京・ニューヨーク・上海が舞台なのもポイントですね。資本主義の権化のニューヨーク、革命が起こった上海というのは、七〇年代を生きた方には、特別な意味があると思います。

・中島みゆき「おまえの家」(1978) — 『愛していると云ってくれ』より

みゆきさんというと、恋に破れた女の歌が多いイメージがあるんですが、もっと感動するのは夢に破れた男に対して歌った歌です。我々も同じことで、ヤクザな世界に身を投じて、夢を見ている途中かも知れないんですが、いずれ醒めることもあるかもしれない。その時、このような鎮魂歌(レクイエム)を歌ってもらうには、それなりの人生を歩んでないといけないんだなあという感じですね。

・小林麻美「月影のパラノイア」
 (1984) — 『Cryptograph』愛の
 暗号』より

実は一番好きなのは小林麻美さんです。最後はこれをどうぞ。

なお、しゃべる時間が長くなり過ぎて、実際にはかけられなかったが、当日は他にも、以下のCDを持ち込んでいた。特に退屈なマル・ウォルドロンの「ファイアー・ワルツ」が、同じエリック・ドルフィーをソロイストにしていながら、一週間後には素晴らしい演奏に変貌したことなど、語りたいたくさんある。いずれどこかで語る日が来ることを願ってやまない。

- ・Mal Waldron “Fire Waltz” (1961) — “Quest” より
- ・Eric Dolphy “Fire Waltz” (1961) — “At The Five Spot Vol. 1” より
- ・Dixie Straits “Sultans of Swing” (1984) — “ALCHEMY” より
- ・石川セリ「ダンスはうまく踊れなく」(1977) — 『気まぐれ』より

(国際日本文化研究センター教授)

